進むメキシコ政治の民主化と2000年大統領選挙

岸川　毅

2000年7月2日に行なわれたメキシコの大統領選挙で，野党国民行動党（PAN）を中心とする変革同盟のビセンテ・フォクス・ケサダ候補が勝利を収め，制度的革命党（PRI）による71年の長期政権に終止符が打たれることになった。連邦議会選挙では上下両院ともに議席の過半数を得た政党はなかった。また同時に実施されたメキシコ市（連邦区）長選挙では民主革命党（PRD）を中心とするメキシコ市同盟のA・M・ロペス・オブラドール候補，州知事選に関してはモレロス州ではPANのS・エストラダ・カヒガル候補，グアナフアト州でもPANのJ・C・ロメロ・ヒクス候補が勝利し，全体として野党の躍進を印象づける結果となった。本稿の目的は，今回の選挙が民主化が進みつつあるメキシコ政治において持つ意味を考察し，選挙をめぐる政治情勢を分析することにある。

1　民主化と2000年選挙

メキシコでは1929年以来，選挙において「公式政党」としての制度的革命党（PRI，結党時の名称は国民革命党PNR）を有利にする仕組にもとづいてPRIが常に勝利してきた。これはいわば政党を軸とした権威主義体制であったが*1，88年大統領選挙において，PRIは分裂し敗北の危機に晒されることとなった。これをきっかけに，政党間の公正な競争による選挙の実施に向けた制度改革が開始された。改革は紆余曲折を経ながらもサリナス政権からセディジョ政権にかけて4度（89～90年，93年，94年，96年）実施された。96年改革の終了をもって，選挙実施機関としての連邦選挙委員会（IFE）の完全独立化が実現するとともに，選挙結果の裁定権限が選挙裁判所（TRIFE）に置かれ，自由で公正な選挙の実施はほぼ保障されるにいたった。手続的民主主義の実施という意味での民主化の条件はこの時点で整い，97年の中間選挙が順調に実施されたことでその効果も確かめられた。97年選挙ではPRIが連邦下院で過半数を確保できず，かつてのような一党による独裁的な政権運営は不可能となった。

したがって今回の選挙の関心は，大統領選挙においても選挙制度の有効性が再確認されるかということ以上に，どの候補がどれだけ得票するかという正常な民主制のそれに移っていた。すでにメ

キシコでは1990年代に入って世論調査が一般化していたため，今回も膨大な量の調査が実施され，結果の公表が法律で禁止されている投票日８日前まで支持動向を国民に伝え続けた*2。年明け以降の各大統領候補の支持率は，調査機関ごとに若干の差はあるものの概ねPRIのフランシスコ・ラバスティダ候補の明らかな優勢に始まり，PANのフォクス候補が少しずつ追い上げた後，最終的にラバスティダ候補のわずかな優勢へと推移した。しかし両候補の差が小さかったうえに未決定ないし無回答の割合が２割ほどに達していたため*3，予測には限界があり，このことが公正な選挙への関心を再び高める結果となった。すなわち，たとえ政府与党側による大規模な不正がもはや不可能だとしても，わずかな不正が結果を左右し選挙後の深刻な紛争につながりかねないため，こうした事態を避けるために完璧な民主選挙が行なわれる必要が生じたのである。2000年選挙は民主化の総仕上げとしての意味をそれだけ強く持たされたことになる。

結果はメキシコが民主化を終えたことを示すには上々の出来となった。投票は平穏のうちに終了し，11万3423の投票所のうち設置できなかったのは17のみであった。当日夜に発表された出口調査と開票速報がいずれもフォクス候補の有利を伝えるなかで，セディジョ大統領は早々と野党候補の優勢を認め，間もなくラバスティダ候補も敗北を認めた。フォクス候補が６％余りの余裕をもって快勝したことで，選挙後の紛争の可能性も遠のいた。選挙後に論議の的となったのはむしろ，なぜ世論調査はフォクス勝利を予想できなかったかという点であった*4。同時に行なわれた連邦議会選挙や地方選挙も含め，2000年選挙では，メキシコの選挙につきものであった結果をめぐる選挙後の深刻な紛争もあまり発生せず，敗北した候補のほとんどが選挙結果を認める姿勢を取った。さらに８月21日に紛争地帯チアパス州で行なわれた知事選挙の投票も，早くから世論調査が優勢を伝えていた野党チアパス連合のＰ・サラザール候補が勝利し平和裏に終了した。

＊1　岸川　毅「政党型権威主義体制と民主化」(砂田一郎・白鳥令編『現代政党の理論』東海大学出版会　1996年)。

＊2　１月19日から６月23日までに722の世論調査結果が公表された。Orellana Mayao, Alfredo, y Carolina Gómez Vinales, "El balance electoral: ¿cuántas cosas han cambiado?," *Este País*, Núm. 113, agosto de 2000, p.17.

＊3　６月17日，18日に『レフォルマ』紙が実施した調査では，ラバスティダ42%，フォクス39%，カルデナス16%，その他３%で，無回答が19%であった。"Mantiene Labastida mínima ventaja," *Reforma*, 22 de junio de 2000.

＊4　この点に関して現段階で専門家の多くは，世論調査そのものの間違いというよりは，最後の世論調査が行なわれた選挙２週間前の時点で未決定だった２割の選挙民が圧倒的にフォクス支持に傾いた結果であり，その際フォクス候補が最終段階でPRD支持者に政権交代のための票を呼びかけたことなどが影響したと見ている。例えば，Covarrubias, Ana Cristina, "Encuestas y elecciones: Primeras evaluaciones," *Este País* Núm. 113, (agosto de 2000); Beltrán, Ulises, "¿Por qué fallaron las encuestas?," *Nexos*, Núm. 272, (agosto de 2000).

2　選挙民の投票行動と各党の選挙戦略

それでは選挙民は2000年選挙において，どのような選択をしたのであろうか。初めて政権交替の可能性が見えた1988年選挙以来，メキシコの選挙民はまず「PRI政権の続行か否か」を問い，次に政権交代を選択した場合に「どの野党か」を問う，いわば「二段階の」基準で政党を選択するように

なったことを投票行動研究は明らかにしている*5。すなわち政権交代によって生じるかもしれない無秩序や混乱というリスクを第一に考え，それが避けられると判断した場合に政権担当能力がありそうな野党を選択するという注意深い投票行動をとる傾向が強かった。しかし民主化の進展とともに政権交代による不確実性への不安は弱まり，選挙の度に「PRIへの安定のための票」は減少していく*6。そこで判断基準として重要性が高まったのが，まず政権担当能力を保証するような安定した党組織と信頼できる指導者の有無であり，さらには民主性，透明性，効率性，誠実さといった「PRIにない」要素であった。

一方，党のイデオロギーや政策路線の違いは決定的な基準にはならなかった。これには基本的な開発路線に関して政党間の違いが明確でなくなったことが関わっている。1982年の経済危機以後，デラマドリ，サリナス，セディジョとテクノクラート大統領の指導するPRI政府が新自由主義に基づく開発路線を本格化させ，規制緩和，民営化，市場統合といった主要な改革を断行していくなかで，既定路線の大幅な変更は現実味を失っていった。野党陣営はこの間に有効な代替案を提示することはなかった。PANは元来経済自由主義を提唱してきた中道右派政党であったし，PRDは左派的言辞を用いて新自由主義を批判しながらも部分的な修正案以上の政策を提示できなかった。今回の選挙でも各党の打ち出した政策に根本的な違いはみられない*7。確かに主要3党はPRIを中心に，右にPAN，左にPRDという位置づけに基く一定の固定的支持層を持ってはいるが，むしろそれとは別の基準で投票する選挙民が政党の勢力関係を決める傾向が強まっているのである。

各政党はこのような選挙民の期待と投票行動の変化にどのように対応し，選挙を戦ってきたのであろうか。次にこの点をみていきたい。

(1) PRI ——長期的低落傾向にあったPRIの得票率は，1988年選挙で5割まで落ち込んだ後，91年にいったん6割余りに回復したものの，94年に再び5割，97年には4割弱にまで下がっていた(下院選挙の得票率は88年51.1%，91年61.5%，94年48.8%，97年38.0%)。しかし99年に入ると，チワワ州を皮切りに実施された州知事候補の予備選実施が地方選挙での相次ぐ勝利につながり，党員による党首と大統領候補の直接選挙の実施が党の民主的イメージを向上させ党勢回復の兆しが現れていた。さらには野党陣営が統一候補の擁立に失敗したことで，大統領選勝利の可能性が見えてきていた。

しかし党は選挙に負の影響を及ぼすような深刻な内紛も抱えたままであった。セディジョ政権において党内では大統領率いるテクノクラート派と党内保守派との確執が頻繁に表面化した。通貨危機と前大統領の事実上の亡命という事態を受けてテクノクラートは初めから守勢に立たされ，1995年6月には大統領側近のE・モクテスマ内相が更迭され，96年9月の第17回党大会では党の大統領・州知事候補を活動歴10年以上の党員に限定する規定が盛り込まれて，全般に党歴の浅いテクノクラートの要職への道が狭められた。逆にこの流れの中で内相に就任したE・チュアイフェト，タバスコ州知事のR・マドラソ，プエブラ州知事のM・バルトレトといった最保守派集団「アトラコムルコ・グループ」を構成する政治家が影響力を増した。そのため強権や汚職といったイメージで見られがちな保守派の推す候補の出馬が目立つようになり，97年メキシコ市長選の大敗が典型的に示すように，党はさらなる不振におちいった。政権後半にはテクノクラートが巻き返したが，両勢力が互いに潰し合ったことは人材不足にもつながり，民主的方法の採用による効果は自ずと限られてい

た。せめぎ合いのなかで最終的にテクノクラート側が担ぎ出したラバスティダ内相は，経験は豊富だが目新しさのない無難な政治家の観を逃れず，大統領選挙の得票率が下院議員選挙のそれをわずかに下回る結果となった。

また，大統領が党から距離を置いたことも選挙に影響したと考えられる。セディジョ大統領は就任当初より，国家と党が融合していた旧体制の悪弊を克服するため，党と「健全な距離」をおくことを唱え，党に一定の自立性を持たせる姿勢を取った。それは時には選挙で不振が続く党に対する無策あるいは見放した態度にすら見えた。一方，大統領自身の就任時の支持率は非常に低かったが，やがて経済危機の克服や誠実さが評価されるようになり，選挙前の『レフォルマ』紙の調査では10段階で7という上々の評価を得ていた*8。しかし大統領への高い評価は与党への票に結び付かず，その一因は大統領と党とのこの距離にあったと思われる。この点は大統領が党を掌握し一体化していたサリナス政権において，大統領への支持が連邦選挙でのPRIの得票率と連動していたのとは対照的である。

そしてPRIには，世論調査がフォクス候補の追い上げを伝えるなかで，事態を打開するような目新しい戦略がなかった。そこで取られた対策は，政権党としての有利さを利用した補助金のばら蒔きや*9，マスメディアでの宣伝の強化といった昔ながらの方法であった*10。これにより選挙直前にはPRI有利との観測も強まったが，得票率は予測を下回った。選挙結果は，PRIの伝統的票田である農村部ですらPANに支持を奪われつつあることを示していて，選挙民が旧来のやり方にあまり応じなくなったことがわかる*11。

（2） PAN――一方1939年に結成され，野党としての長い歴史を持つPANの得票率は漸増傾向にあった（下院選挙の得票率は88年18.0%，91年17.7%，94年24.9%，97年25.9%）。PANの選挙戦略の重要な特徴は地方を基盤とした勢力拡大であり，とりわけ80年代以降，伝統的支持基盤である北部地方で，地元の企業家層を中心とする党活動家が，経済危機後に各地で鬱積しているPRI体制への不満を吸収しつつ，自由で公正な選挙の実施と反中央集権を訴えて支持を伸ばした。サリナス政権ではまず選挙制度改革への協力と引き換えに自党の勝利を認めさせる戦略によって，89年バハ・カリフォルニア州で初の州知事を誕生させ，以後順調に地方選挙を勝ち抜いて行政経験を積んできた。PANの政治家の多くは州やムニシピオにおいて行政機構を企業のように運営してきたことで知られているが，それは概して地道に成果を追求するクリーンで効率的なものであった*12。カトリックの保守的価値観に基づく条例の施行などが反発を呼ぶことがあったのは確かであるが，PANの地方行政が概ね好意的評価を得たことは，いったん確保した地盤を比較的良く保持していることからもわかる。今回のモレロス州知事選での初勝利とグアナフアト州知事選での2度目の勝利もこうした勢力拡大の延長線上にある。このような地方を基盤とした積み重ねが連邦レベルでの得票率を底上げし，緑の党（PVEM）との連合による効果も加わって，下院での38.3%という数字につながったと考えられる。

しかしそれでも今回は大統領選挙の42.5%という数字が際立つ。連邦議会選挙でPRIとの差が1.4%であるのに対して，大統領選挙で6.4%の差をつけたことは，今回の勝利にフォクス候補の個人的人気が大きく貢献したことを示している。メキシコ・コカコーラ社の元社長であったフォクス氏は，1995年のグアナフアト州知事選において圧倒的勝利で当選した後，企業経営的手法で「良質の政府」を目指す政権運営によって成果を上げてきた*13。

大統領・連邦議会選挙結果

	大統領	下院		上院	
	(%)	議席	%	議席	%
PRI	36.1	209	36.9	60	36.7
変革同盟	42.5	223	38.3	51	38.1
(PAN)		(208)		(46)	
(PVEM)		(15)		(5)	
メキシコ同盟	16.6	68	18.6	17	18.9
(PRD)		(51)		(15)	
(PT)		(9)		(1)	
(その他)		(8)		(1)	
PCD	0.6	0	1.2	0	1.4
PARM	0.4	0	0.7	0	0.7
DS	1.6	0	1.9	0	1.8

(注) 政党名—PRI：制度的革命党，PAN：国民行動党，PVEM：緑の党，PRD：民主革命党，PT：労働党，PCD：民主中道党，PARM：正統革命党，DS：社会民主党

(出所) "Los votos contaron.....y se contaron," *Voz y voto*., Núm. 89-90, julio-agosto de 2000, p.42 ; Dworak, Fernando F., "¿Qué esperar de la LVIII Legislatura?," *Este País*, Núm.114, (septiembre de 2000), p.20.

公開討論では明快な議論を展開して支持を伸ばし，PRI候補を追い上げた。そして最終段階で「政権交代のための票」をPRD支持者に呼びかけたことは，先に述べた選挙民の投票行動を捉えた戦略であった。さらにムニョス・レド候補が選挙直前にフォクス支持に回ったことも有利に働いたと考えられる。

(3) PRD ——片やPRDはメキシコ市長選での勝利を除いては，あまり芳しい結果を残せなかった。PRDは，PRIを離党して出馬した1988年選挙で3割を超える票を獲得したクアウテモク・カルデナスの率いる政党として89年に結成されたが，その後は政府側の妨害や弾圧，慢性的内紛からくる組織の不安定性，支持基盤の弱さなどから伸び悩んだ（下院選挙の得票率は91年8.3%，94年16.2%）。しかしロペス・オブラドールが党首に就任した96年の後半からは地方選挙で勢力を伸ばし始め，97年選挙では25.0%の得票を得て下院で野党第一党に躍り出たのみならず，初の公選となったメキシコ市長選でカルデナス候補が圧倒的勝利を収めた。これら一連の勝利は新党首の考案による選挙運動チーム「太陽部隊」の精力的活動，マスメディアの積極的活用，PRIからの離反者の擁立，他党との連合といった新たな戦略の結果であり，この時期には党内紛争もいったん沈静化した。PRDはその後もいくつかの州知事選で勝利を収めたが，党首が交替し大統領選挙が近づくにつれて再び党内の調和が乱れ，党創立者の一人のムニョス・レドは離党して正統革命党(PARM)から出馬を決めた。

3度目の大統領候補となったカルデナスは，選挙戦で新機軸となるような政策を打ち出すことができず，世論調査でも終始10%台で一度も優位に立てないまま前回とほぼ同じ得票率に終わった（1994年16.1%，2000年16.6%）。労働党（PT）などとの連合候補であったことを考えると，得票率は前回より減ったとも言える。また大統領選挙の得票率が連邦議会選挙の得票率を2%下回っていることは，党以上にカルデナス個人が選挙民にとって魅力を失い，その票がフォクス候補に流れたことを示唆している。メキシコ市長としての在任中には支持率は減少傾向にあったので*14，メキシコ市長選での連続勝利も基本的にロペス・オブラドール候補自身への支持と考えた方が自然である。

以上，各党の選挙の戦い方と成果を比較して見えてくるのは，メキシコ選挙民の投票行動が2000年選挙においても，基本的には民主化期を特徴的づけた「二段階の」選択の延長線上にあるということである。すなわちPRIへの安定のための票を投じる必要性を感じなくなった選挙民のなかで，政策路線の違いよりは民主化した政治環境でより良き政権運営を実現できそうな野党と候補者に投票する人々が増え，そうした基準をより多く満た

したのがPANでありフォクスであったということである。

また今回は選挙の種類によって別の党に投票する「分割投票」も見られた。すでに述べたように大統領選挙では政党としてはPANを支持しない選挙民がフォクス候補に投票した証拠があるが，メキシコ市では逆にPRDから市長が当選する一方で，市議会議員選挙ではPANが第一党となった。従来メキシコでは同時に複数の選挙が実施された場合には各党の得票率はどの選挙でもほぼ同じになるのが一般的であったので，分割投票は，選挙民がますます戦略的で冷静な判断を下すようになった証拠と言えよう。

*5 Domínguez, Jorge I., and James A. MacCann, *Democratizing Mexico: Public Opinion and Electoral Choices*, Baltimore, The Johns Hopkins University Press, 1996.

*6 Cinta, Alberto "Uncertainty and Electoral Behavior in Mexico in the 1997 Congressional Elections," in Domínguez and Alejandro Poire eds., *Toward Mexico's Democratization: Parties, Elections, and Public Opinion*, New York, Routledge, 1999.

*7 政策の違いは消費税が10%か15%かといった程度の差でしかなかった。"Candidatos se enfrentan por escrito," *Reforma*, 26 de mayo de 2000. 選択肢の不在ははすでに97年選挙の頃から指摘されていた。"Ante las elecciones, en materia económica, no hay alternativa," *Proceso*, Núm. 1075, 8 de junio de 1997.

*8 "Siguen aprobándolo, pero temen crisis," *Reforma*, 1 de junio de 2000.

*9 PRIは農村を対象とする支援プログラムのPROCAMPOやPROGRESAを利用して伝統的票田の確保を図った。"Coacción al voto con el Progresa," *El Financiero*, 3 de julio de 2000.

*10 選挙報道は量的には依然として圧倒的にPRIに有利であった。"Acapara PRI 40% de tiempo en noticieros," *Reforma*, 21 de junio de 2000.

*11 "Los pobres cambian su voto," *Enfoque (Reforma)*, Núm. 340, 6 de agosto de 2000.

*12 例えばバハカリフォルニア州に関する次の事例研究を参照。Rodríguez, Victoria E., and Peter M. Ward, *Political Change in Baja California: Democracy in the Making?*, La Jolla, Center for U.S.-Mexican Studies, UCSD, 1994.

*13 Muñoz Gutiérrez, Ramón, *Pasión por un buen gobierno: administración por calidad en el gobierno de Vicente Fox*, México D.F., Disem, 1999. 大統領選で打ち出した諸政策にも企業家的発想が随所に見られる。Fox, Vicente, *A Los Pinos: recuento autobiográfico y político, México*, Oceano, 1999 ; Fox, *Vicente Fox propone*, México D.F., 2000 Ediciones, 2000.

*14 "Evaluación del desempeño del gobierno capitalino," *Este País*, Núm. 112, (julio de 2000).

3 選挙後のメキシコ政治

選挙が無事終了したことで，政治の焦点は12月1日の政権交替へと移っていく。最後にこの点について検討する。任期満了を控えたセディジョ大統領は各種世論調査で6割前後の支持を得ている。9月1日の最後の教書演説で大統領は，まず自分が職の遂行に際して歴代大統領を特徴づけた権力の濫用を控え，法に基いて厳格に行動したと述べ，成果として民主化過程を完了させた点と，政権発足直後に直面した危機を克服し経済を回復に導いた点を強調した。一方未解決の課題として深刻な治安の悪化を認め，また今後は民主主義という制度をうまく機能させ定着させることが必要であると述べた。短い演説でチアパス問題など具体的問題への言及はなかった。教書演説をPRIの議員は無言で聞き，PANの議員は拍手で応えた。PRD陣営からは6000万人の貧困層と書かれた紙が掲げられたものの，中断や混乱もなく教書演説は静かに終了した。当日の夜に実施されたテレビサ（テレビ局）の電話調査では「国は6年前と比べて良く

なったか」との質問に対し，56%が「良くなった」と答え，「悪くなった」の19%を大幅に上回った。メキシコではこれまで大統領任期の終わる6年ごとに深刻な危機が発生しているため，大統領はこうした事態，とりわけ経済危機の回避に気を配っている。元政府要人の汚職発覚など政権の変わり目の混乱を想わせる出来事がないではないが，今のところ政権交代の準備は順調に進んでいる模様である。

では政権を引継ぐフォクス次期大統領はどのような政権運営を行うのであろうか。少なくともすでに明らかなのは，2000年選挙でのPANの勝利が絶対的なものではなかったため，あらゆる重要な政策決定において他の政治勢力との合意が不可欠となることであり，その際とくに二つの制度上の拘束を受けるということである。

まず第1は議会との関係である。PANは上下両院ともに過半数を確保できなかったため単独で法案を可決できず，大統領と議会の関係はいわゆる「分割政府」状態になった。この場合一般に両者の対立が膠着状態につながりやすく統治不可能になる危険性もあるとされる*15。ただメキシコで分割政府は初めてではなく，1997年にPRIが下院で過半数を割った時にすでに生じている。この時も混乱を危惧する声が強かったが，現実には必ずしもPRI対4野党（PAN，PRD，PT，PVEM）の構図にはならず，争点によって政党間の連合パターンが変化したことで，法案の潰し合いによる機能麻痺や大統領との対立といった事態は起こらなかった*16。当時はPRIが過半数を維持する上院で大半の法案に決着をつけることができたという事情はあったが，野党がPRI支持に回ったことで裁決された法案も多く，下院が議定権を持つ予算案もPANが支持に回って決着している。つまり政党は議会の機能を妨げるような行動は取っておらず，分割政府は今後の議会運営において必ずしも決定的な不安材料ではない。

しかし議会が徐々に活性化するなかで大統領との力関係が変化しつつあることは間違いない。例えば第56回議会（1994～97年）で成立した法案のうち大統領提出法案が76%，議員提出法案が23%であったのに対し，第57回議会（1997～2000年）においては99年までに大統領提出法案が31%，議員提出法案が60%と逆転している*17。議員提出法案は急増しつつあり，処理能力を超えてきている点が問題ではあるが，可決される確率は上がっている。また従来はほぼ確実であった大統領提出法案の成立可能性がわずかだが減少し，修正を加えられることも多くなった*18。この傾向は今後さらに強まることが予想される。

第2の制度上の拘束要因は州との関係である。1989年の初の野党州知事誕生から10年余り経ったいまPRIが19，PANが9，PRDが四つの州（メキシコ市も含む）を治めている。州知事の数では依然としてPRIが最も多いが，人口が集中し経済発展のレベルの高い州をPANが押さえ，PRDも首都を押さえているので，州レベルでも圧倒的勢力を持つ政党はなく多元的構成であると言える。連邦政府の力は相対的に弱まりつつあるが，これに関しては州の自立性が増して「正常な連邦制に向かう」という側面と，保守的知事の治める州においてかえって「権威主義が強化される」という側面とがあって事情は複雑である*19。すでにセディジョ政権期から大統領はPRIの保守派州知事を統制できなくなっていて，PAN政府の成立を前にこれらの州知事はますます団結し抵抗する構えを見せている。しかしいずれにしても連邦政府は州レベルでの合意を必要としている。例えば憲法改正を要する国家機構の根本的改革には，16の州議会の同意が要件であり，これは事実上PRIの協力が不可欠

であることを意味している*20。

確かなことは，これらの制度的拘束が，メキシコが「大統領制」と「連邦制」を柱とする憲法体制本来の姿を実現する過程で生じた，いわば民主化の当然の帰結だということである*21。その意味で民主化後の政権は多元性と合意を前提とする政権運営を運命づけられている。次期大統領もこの点を認識し，合意なしに政策は実施しないと繰り返し表明している。また，PANの人材不足という面もあるが，出身政党にはこだわらず優秀な人材を登用する方針を明らかにしていて，これも政府の多元的構成につながると思われる。

さて，こうした制約のもとでフォクス新大統領は貧困，治安，汚職など山積する困難な問題に取り組まなければならない。次期大統領はマクロ経済面での成長が国民各層にゆきわたるようにすると述べているが，貿易の振興や国際競争力を強調するPANの経済自由主義と貧困の軽減が両立し得るのかを疑問視する意見は根強い。汚職の一掃は大幅な改善が期待される課題であるが，治安の回復や麻薬犯罪の撲滅はきわめて構造的な問題であるだけに短期的解決は望めそうにない。またPAN政権になって浮上するであろう問題として家族や性に関する道義上の問題がある。フォクス氏自身は穏健な立場をとるが，党内にはきわめて保守的な勢力があり，早くもグアナフアト州で可決された中絶に関する法律をめぐって全国で激しい論争が起こっている。

ただ国民もフォクス政権がこれらを一度に解決すると考えてはいない。8月の『レフォルマ』紙の調査では約6割が次期大統領を好意的に見ているが過大な期待を寄せているわけではなく，経済，教育，治安，貧困といった問題は「時間はかかるだろうが解決する」と予測し，麻薬組織の問題は解決困難との見通しを示している*22。そもそもPANは奇跡を約束することなく地道な改善と透明な政府運営によって信用を得てきた政党であり，国民もこれに沿った抑制の効いた期待をしていることが窺える。したがってフォクス次期大統領には，急激な変革というよりは，これら一つ一つの課題が着実に解決に向かっていることを目に見える形で国民に示しながら，政権を運営していくことが求められるであろう。

*15 Linz, Juan, and Arturo Valenzuela eds., *The Failure of Presidential Democracy*, Baltimore, The Johns Hopkins University Press, 1994.

*16 Nava Polina, María del Carmen, y Jorge Yánez López, "Saldos de la pluralidad en San Lazaro," *Este País,* Núm. 113, (agosto de 2000); Dworak, Fernando F.,"¿Qué esperar de la LVIII Legislatura?," *Este País*, Núm. 114, (septiembre de 2000).

*17 Nava Polina y Yánez López, "Saldos de la pluralidad en San Lazaro," p.27.

*18 Ibid.; Nava Polina, Jeffrey A. Weldon, y Yánez López, "Cambio político, presidencialismo y producción legislativa en la Cámara de Diputados: 1988-1998," en German Pérez y Antonia Martínez comps., *La Cámara de Diputados en México,* México D.F., Porrúa, 2000.

*19 Cornelius, Wayne A., Todd A. Eisenstadt and Jane Hindley eds., *Subnational Politics and Democratization in Mexico*, La Jolla, Center for U.S.-Mexican Studies, UCSD, 1999.

*20 "La reforma del Estado de Fox, virtualmente en manos del PRI," *Proceso*, Núm. 1242, 20 de agosto de 2000.

*21 Lujambio, Alonso, *Federalismo y congreso en el cambio político de México*, México D.F., UNAM, 1995.

*22 "Genera Fox altas expectativas," *Reforma*, 4 de septiembre de 2000.

（きしかわ・たけし／上智大学国際関係研究所）